

穂積皇子に勅して、近江の志賀の山寺に遣はす時に、但馬皇女の作らす歌一首

一一五番

後れ居て 恋ひつつあらずは 追ひ及かむ 道の
隈廻に 標結へ我が背

但馬皇女、高市皇子の宮に在す時に、竊かに穂積皇子に接ひ、事既に形はれて作らす歌一首

一一六番

人言を 繁み言痛み 己が世に いまだ渡らぬ
朝川渡る

舍人皇子の御歌一首

一一七番

ますらをや 片恋せむと 嘆けども 醜のますら
を なほ恋ひにけり

舍人娘子の和へ奉る歌一首

一一八番

嘆きつつ ますらをのこの 恋ふれこそ 我が結
ふ髪の 漬ちてぬれけれ